



TITLE:

横井小楠の經濟思想

AUTHOR(S):

本庄, 榮治郎

---

CITATION:

本庄, 榮治郎. 横井小楠の經濟思想. 經濟論叢 1939, 48(3): 455-470

ISSUE DATE:

1939-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131225>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第三號

昭和十四年四月三號

## 論 叢

政府支出と所得増加……………文學博士 高田 保馬  
横井小楠の經濟思想……………經濟學博士 本庄榮治郎  
特殊リンク制の諸問題……………經濟學博士 谷口 吉彦

## 時 論

支那に於ける門戶開放……………法學博士 末廣 重雄  
増稅案を論ず……………經濟學博士 汐見 三郎

## 研 究

神代に現はれし日本の創造の型……………經濟學士 中川與之助  
公正價格の意義……………經濟學士 中 谷 實  
靜態的貨幣理論と動態的貨幣理論……………經濟學士 服部 新一  
複式簿記法の形成過程に就いて……………經濟學士 岡本 愛次

## 說 苑

ル・プレーの經濟發達階段說……………經濟學士 宮本 又次

## 附 錄

彙 報  
外國雜誌論題

# 横井小楠の經濟思想

本庄榮治郎

## 一 略 傳<sup>1)</sup>

横井小楠は幼名を又雄、通稱を平四郎、實名を時存、字を子操と稱し、畏齋・小楠・沼山などと號した。肥後藩士横井大平（時直）の第二子、文化六年八月十三日熊本城下内坪井町に生れた。幼にして藩校時習館に學び、屢々賞詞を受け、廿九歳のとき（天保八年）居寮長となり、三十一歳のとき江戸に遊學し、林大學頭の門に入り、碩學を訪ひ、幕府及諸藩の偉才と交り、特に藤田東湖等と親交があつた。天保十一年歸藩後、家塾を開き、藩學派に對する實學派の興起となつたが、嘉永四年上國の形勢を探らため上坂し、更に九州・山陽・近畿・名古屋・北陸各地を巡歴し、知名の士を訪うて交驩を遂げ、八月二十一日歸國した。安政五年福井藩士松平慶永（春嶽）の招聘に應じ、同藩の賓客となり、學を講じ機務に參與したが、當時の慶永の建白は多く小楠の立案にかゝりその論策は政治經濟の各方面に及んでゐる。かの由利公正の如きも當時小楠の教を受けた者である。文久二年七月春嶽政治總裁職に就任するや、小楠その帷幄に在つて建策する處多く、幕府有司にもその材幹を認められた。文久三年熊本に歸つたが天下の志士來り訪うて時務策を問ふもの多く、坂本龍馬の如きもその一人であつた。明治元年四月徴士參與となり、明治政府の創業に參畫したが、二年正月五日退朝の途上京都寺町門外にて難に逢うて仆れ

1) 上卷 横井小楠、山崎正董著、横井小楠遺稿、卷頭所收、小楠先生小傳、横井時雄編、

た。ときに六十一歳。昭和三年十一月特旨を以て正三位を追陞せらる。

## 二 經濟思想概観

小楠は幕末の庶政革新は一に公議政體を確立するに在りと主張し、參觀交代制度の改革、專賣政策の採用、紙幣の發行、商社の設立等とき開國貿易によつて國富の増進を圖るべきことを説いたものであるが、幾多の論策中その經濟思想を窺ふに足るものに「富國論」がある。<sup>2)</sup>之は萬延元年福井藩に對し富國・強兵・士道の三事を國是とす可きを論じた「國是三論」中の一論であるが、その骨子は、鎖國も交易も共に害がある。而も我國が一個の私見を以て鎖國をなすことは不可能であるから、萬國の事情に従ひ、公共の道を以て天下に臨まば、今日憂ふる所は憂ふるに足らざるものである。先づ一國の經綸は國內の遣り繰り經濟にては時務に應ずるに足らず、通商の利を興し、財用を通じ、以て仁政を施すべきである。それには五穀その他の產物を商賈の手に渡さず、官營又は商權回收の方法により、並に官府の金融を計つて農工商生計の途を得せしめ、士も亦次男以下其才力に應じ適所に之を用ゐ、又は産業に従事せしめて之を富ますことが必要である。かゝる政を布くために財用を如何にすべきかといふに、先づ紙幣によつて金融を計り、產物を海外に輸出することによつて正金を得るに在る。かく通商交易を基本とするは必ずしも西洋風を善しとするためではない。交易も政事も皆民を養ふことが本體である。之を要するに『今や天徳に則り、聖教に據り、萬國の情狀を察し、利用厚生大に經綸の道を開ひて政教を一新し、富國強兵、偏に外國の侮を禦んと欲す。敢て洋風を尙ぶにあらず、聞く人其原頭を愆り認る事なかれ』と。以下

2) 横井小楠、下卷、29—41頁

「富國論」を骨子とし、更に他の論策によつて小楠の思想の各方面を詳述しやう。

### 三 開 國 論

既に述べたる如く小楠は實學派に屬してゐるが、勤王派の人々とも交友があり、尊王攘夷であつた。<sup>3)</sup>然るに安政元年の日米和親條約締結以來、彼の考は變化した。それは和といひ戰といふも畢竟偏したる意見である。時に應じ勢に従つて、その宜しきを得るのが眞の道理である。既に米國に和親を約した今日では和を絶つて戰に引返すことは出来ないから、和は和にして置き、内は講學を以て列藩君主を一致せしめ、外は應對の人物を選び、自然の理を以て外人の心を服せしむべきであると考へた。處が翌安政二年に入つて明かに開國論を説くに至つた。

それは「海國圖志」(道光二十二年成る。二十七年增補出版。版。嘉永七年乃至安政二年鐫刻出版)の影響を受けた點が大であると説かれてゐる。<sup>4)</sup>

然し小楠の意見が絶對鎖國論ではなく、信義ある國とは交通々信を許すものであり、寧ろ開國がわが國是であるとの論は、安政元年の前年たる嘉永六年十月に草せし「夷虜應接大意」にも之を窺ふことが出来る。<sup>5)</sup>即ち曰く『我國の萬國に勝れ、世界にて君子國とも稱せらるゝは天地の心を躰し仁義を重んずるを以て也。(中略)凡我國の外夷に處するの國是たるや、有道の國は通信を許し無道の國は拒絶するの二ツ也。有道無道を分たず一切拒絶するは、天地公共の實理に暗して、遂に信義を萬國に失ふに至るもの必然の理也』とて鎖國は必ずしもわが國是にあらず、有道の國とは交際することが國是である。それで『今彼に答には有道を許し無道を絶ち、國是の大本として一切鎖國するの道にはあらずる事を明に示し』云々と論じてをり、<sup>6)</sup>従つて絶對攘夷ではなかつたことは、

3) 横井小楠、上卷、257—262頁。嘉永三年五月十三日三寺三作宛書狀及同六年八月十五日藤田東湖宛書狀等にも攘夷の思想を見ることが出来る。(横井小楠、下卷、135, 204頁) 4) 同上、上卷、333—337頁。下卷、215—217頁  
5) 小楠遺稿には嘉永七年十月下浣起草としてゐる  
6) 横井小楠、下卷、11—12頁

安政以前に於て既に然りであつた。

當面の問題としては米國の要求を入れて國を開くか否やに在るが、之について小楠の論する所を見るに、當時の世論には四種の説がある。即ち

- 一、我宴安に溺れ彼威強に屈し、和議を唱ふるもの
- 二、鎖國の舊習に泥み、理非を分たず一切に外國を拒絶して必戰せんとするもの
- 三、戰んと欲すれども天下の士氣頽廢して皆驕兵たるを憂へ、暫く屈して彼と和し、其間暇を以士氣を張り、國を強して後彼と戰んと思ふもの

四、必戰の計を決して幕府列國材傑の人を舉用せんとするもの

で第四を以て最も緊要のものとしてゐる。假初にも彼と和する心ある時は天下の人心彌益惰弛に趣き、士氣の振起を期すべからず、兵器を整ふ可らず、よつて必戰の計を決して天地の大義を明かにし、人材を集めて、政を改め人心を一新することが必要である。必戰の計を決するは、正義を天地に貫くの意であり、絶對攘夷の意味ではない。彼が無道を改め、其信義世界萬國に貫徹する時を待て通商通信を議せんとするものである<sup>7)</sup>。

萬延元年の「富國論」には更に交易の害と鎖國の害とを詳述してゐる。先づ交易の害として擧げてゐる處は次の如くである。即ち鎖國の立場よりすれば『數百年の鎖國、毫も不足の事を知らず』、然るに今國を開いて交易をなさなか、我が出す處は有用の物であり、彼より入るゝ處は我には無用の物である。従て、有用を以て無用に易ふ其害一、彼に出す處多ければ我が有する處不足して我用を缺く其害二、其物滅し其用不足する故其價大に貴

に至る其害三、其利を得る者は數輩の商賈にしてその害は全國に被る其害四、假令物品を金銀に換るとも、金銀も從來事を缺にあらざれば、此上の事に不用にして有用の物を減するに替る事なし其害五、目下既に交易の爲めに物價騰貴して四民其害を受けてゐる、是れ交易を開ける害である<sup>8)</sup>。

然るに鎖國の害も亦大である。太平久しきに從ひ驕奢となり金銀の費多きも、金銀は増す事なく、國中の人口は増加するも、土地は古昔の儘であるから、費す處多くして出す處少く、上下共に驕りて困窮し、而も遊手徒食の輩十の九に至り、生産者少くして消費者多き故、物價自ら貴く、物價貴くして金銀不足し、金銀不足すれば四民困窮する。乍併農工商の三民は力を以て食ふ故、物價に隨ふて力役の價を増す故猶爲すべき様あれ共、唯士と稱する者は大名を始として收る處限り有て、出す處其限を超えるに至れば實に爲すべき様なし。已むを得ず諸士の俸祿を借り豪農富商を絞り、細民の膏血を吸ふても今日の急を救はざるを得ない。農商も是が爲に疲弊を受る故、愈々物價に就て其窮を免れんとするに至り、其弊また士に及び交互困窮するに至る。此弊を救ふためには、大節儉を行ふて、衣食住を初、不益を省き有用を足すべきであるが、不益を省きて猶足らざるときは遂に有益を省くに至る。有益を省くときは、與ふべきものをも與へざるに至り、且官自ら儉して漸く官の急を救ふ勢であるから、士民の急を救ふに違あらず、士民自らも亦儉して其窮を免れんとするも、浸潤せる驕奢の弊は一朝にして復すること難く、奢侈既に風を爲して奢侈と思はず、却て節儉を以て困難苛酷の新法の如く心得、遂に治世救恤の術なきに至る。方今航海自由を得て萬國比隣の如く交易する中に就て、日本獨り鎖國の法を固くする時は外寇の兵釁を免るゝ事を得ず、其時に當つて治世すら殆困極せる國勢を以て兵備を嚴にし、防禦の策を建て、攘夷の功を奏

せんことは覺束なき次第であつて、是れ即ち鎖國の害である。<sup>9)</sup>

かくの如く開鎖共に害ありとせば如何にすべきであるか、『日本一國の私を以て鎖閉する事は勿論、たとひ交易を開きても鎖國の見を以て開く故、開閉共に形のごとき弊害ありて長久の安全を得がたし。されば天地の氣運に乘じ萬國の事情に隨ひ、公共の道を以て天下を経綸せば萬方無碍にして今日の憂る所は惣て憂るに足らざるに至るべきなり』と論じてゐるが、封建鎖國經濟は何事も國內のみの遣り繰り經濟に過ぎぬ。譬へば『一斗なれ一升なれ、升を以て斗りたるごとく、何事も其升内にて辨せざる事を得ず。(中略)且自國豐熟にして他國は凶歉ならん事を祈るごとき氣習なる故、明君有ても纔に民を虐ざるを以て仁政とする迄にて、其眞の仁術を施すに至らず、良臣といへるも土地を開き府庫を充るを務として孟子の所謂古の民賊たるを免がれず』然るに『方今交易の道開けたれば外國を目的として信を守り義を固して通商の利を興し、財用を通せば君仁政を施す事を得て、臣、民賊たる事を免がるべし』とて開國交易の必要を斷じてゐる。<sup>10)</sup>尙「國是十二條」の中にも『交外國』の一項を掲げてゐるが、その詳細なる説明はない。<sup>11)</sup>

## 六 貿 易 論

小楠は既に開國論を持してゐる。従つて貿易を是認してゐることはいふ迄もないが、『富國論』には『通商交易の事は近年外國より申立てたる故、俗人は是より始りたる如く心得れども決して左にあらず。素より外國との通商は交易の大なるものなれ共、其道は天地間固有の定理にして、彼人を治る者は人に食はれ、人を食ふ者は人に治

9) 同上、30—32頁  
10) 同上、32—33頁  
11) 同上、90頁



らるゝといへるも則交易の道にて、政事といへるも別事ならず、民を養ふが本體にして、六府を修め三事を治る事も皆交易に外ならず<sup>12)</sup>とあつて、交易の意味を廣義に解し殆んど經濟又は政治と同様に解してゐるやうであるが、之は通商交易を基本として政治經濟を立てる意味である。然し具體的に外國貿易の意味に於ても之を論じてゐる。例へば同じく「富國論」に『今や民間に無量多數の生産あり共、是を海外に運輸すれば價を減ぜず且壅滯の憂なし。されば勉めて産を制するが爲に民を富し、産を生ずるによつて國を富し士を富すべし<sup>13)</sup>』と説き、「海外の形勢を説き併せて國防を論ず」の一節に『交易の道、勝手に交易し、又物を以て物に易るに利あり<sup>14)</sup>』といへる如き、又松平春嶽への建言に

『外國の交易、商法の學有りて世界産物の有無を知らべ、物價の尊下を明にし、廣く萬國に通商し、更に又商社を結び互に相影響を爲す。如此練熟を以て我が拙劣の人に對す。殆ど大人と小兒との如し。是彼が大奸を爲す所以なり。十餘年來三港の交易我に於て一人の富を爲さず、彼は總て大富有の商と爲れり。此現實にて是迄の交易我が大損たる事分明なり。要之我より外國に乗り出さざるの大弊にて今日是を改めんことを欲す。西洋に於ては魯・英・佛・墨・蘭の五國、漢土にては天津・定海・廣東の三港に日本商館を設け建つ可し。』

とて出貿易の必要と海外へ商館を建つことを説き、更に内地に商社を設くべきことを論じてゐる。即ち

『さて内地に於て商社を建て、兵庫港なれば五畿内・四國・南海道の大名は申に不及、商人・百姓たり共、望に因ては其社に入れ同心一致いたし、相共に船を仕立乗り出し交易すべし。他の三港は是に準じて略す。唯妄に出入を禁じ、必ず其港の鎮臺の印鑑を受け、行く先き日本商館に達すべし。歸帆も又同様なり。如此なれば自然に商法に熟し、其利を得ること分明なり。内地も又自然に彼等が奸を制し公平の交易に歸すべし』

と論じてゐる。<sup>15)</sup>この出貿易、商館及商社に關する意見は注意すべきものといはなければならぬ。

文久二年の幕府への建言書たる「國是七條」の一ヶ條には『止相對交易、爲官交易<sup>16)</sup>』とあるを以て、商人の相

12) 同上、38頁  
15) 同上、95頁

13) 同上、36頁  
16) 同上、98頁

14) 同上、63頁

對貿易を止めて官貿易即ち幕府若くは藩政府と外國船との貿易をなすべきことを提唱せる如くであるが、その詳細なる理由及方法については説く所なきを以て之れを知るを得ない。

#### 四 商權回收・資金融通・産業獎勵論

開國通商は自ら生産流通の各方面の機構をも改むる必要に迫られてゐるが、小楠は之について商權回收と官の融通とを説いてゐる。即ち『五穀租税の外並糸・麻・楮・漆の類を初、惣て民間に生産する處舊來悉く商賈の手に賣渡す、故に其價尤賤く、就中姦商に逢へば種々の欺詐を受て其半價を得て止む者も亦多し』因て『是を官府に收むべし、其價は民に益ありて官に損なきを限とし、官に於て別に利を見る事なければ民自ら其惠を蒙るべし。但横濱・長崎等より物品月々の相場を聞調べ、民間にて賣る處の相場に引當、諸港への運賃其餘の雜費を加へ官府に損なくば民の乞ふに任せて精々高價に買べし』。然し國中の所産凡幾十萬金にも達するであらう。之を悉く官府に買ふことを得ざる場合は『たとへば福井三國港等に大問屋を設け、豪農・富商の正直なる者を選び元締となし、諸産物を買ふ事官府と同様なるべし』と説いてゐる。<sup>17)</sup>

而して物品製造者に低利の官金を融通し、或は生産の方法を教へ、器械を貸與し、遊手徒食の者なく各その職業に就かしむべきことを説いてゐる。即ち次の如くである。<sup>18)</sup>

『一以上諸物品を作り出し或は作り増んと欲すれ共、力足らずして意の如くなる事を得ざる者多し。官又是に錢穀を貸して其の意を遂しめ、其物品を官に收め、其價によつて其價を償しめ、又利息を見る事なければ民大に便を得て且惠を蒙るべし。』

17) 同上、33頁  
18) 同上、34頁

但元仕込・夫食・糞し仕入といへる類悉官府より貸出し利息を取事なく、相對に高利の金銀を借の元費を免れしむ。惣て官府の貸出しは、元金を損せざる迄にて利を見る事なるべし。官府の利は外國より取るべし。

一以上の諸物件其他民間所産の生育・製法等に付、簡便の方法器械等あるは、先づ官に試み、其實驗を経て是を民に施し教へ導くに惻怛の良心を以てすべし。

但し養蠶術を初め諸産生方并農具其外にも大に人力を省き便利の仕方も有之由、是等皆官府に於て十分試験に及び衆人の信を取りて後施し行ふべし。たとひ便法なり共、新の事を強ふれば却て民心を害する事多し。

一工・商も亦同じ。其米錢を貸し其便利を教へ其活計を通利せしむ。

遊手徒食の類皆其好む處に隨ふて各其職業に就しむるに其用其具悉く官よりは是を貸すべし。』

商權同收論は當時屢論ぜられた處であるが、<sup>19)</sup>それには官府に利益を收むることも目的の一つであつた。然し小楠

の考は之と異なる。即ち『國家の大害は聚斂の利政より甚敷は無く、一たび國を憂ひ民を憐むの心起るときは、第一に貨殖の筋を止めざれば一日片時も安らかなる心無き事なり』とし、寶曆以後肥後藩にて櫛方を置き貨殖の政をなせしより、其後の役人貨殖を扱ふを國政の第一義と心得、平準方、蠟<sup>ロウ</sup>所等の貨殖局を起し利を争ふに至つた。かくて一國を舉げて聚斂の利政に困み、御家中は大抵無手取に成り、町・在は利息の取立に苦み、或は家藏を封印し又は田地を失ひ、誠に苛政は虎よりも猛しとの古人の言を目の當り見る有様となつた。かくの如きは富國の本意ではないから、すべて官府を利する手段を捨て、國中士民の利益となる道を探るべきであり、公儀よりの御手傳の如きも官府と國中一統と半高わけに負擔すれば、貨殖の政を行はずとも實行することが出来る。『兎角官府を富ますを以て富國と心得、必多物<sup>ヒタモノ</sup>に國中の利を吸ひ取り、果は士民共に困窮に墜入れば、官府のみ富たりとも無益の事にて、積りは禍亂を醸し成すに至る事なれば、得と此の道理を考へ凡ての法度法令富國の道に改

正す可き事に存するなり』と斷じてゐる。<sup>20)</sup>これ商權回收論に於ても官府は利を計らず、損なきを限度として民の乞ふに任せて精々高價に買取るべきこと、並に無利息の融通を説ける所以であらう。

## 五 武士救済及授産論

農工商庶民をしてその生を遂げしむる方法は上述の如くであるが、然らば士の困窮は如何にすべきであるか。之に對して小楠は分限を忘れて驕惰のため困窮に陥入れるものは恒心を失へる者であるから論に及ばず、その困窮の憐むべきものは、災厄に遭ふた者と分限に過ぎて眷族多き者との兩者であるとし、前者に對しては災厄の大小輕重に従つて救済の制を設けて假貸賑恤すべきを説き、後者に對しては次男以下その才力の長短により多少の俸祿を與へて衣食の急を免れしめ、適所に之を用ふべきである。

『譬へば航海に志ある輩は海濱に居らしめ航海の具を與へ、養蠶を願ふものは桑田に居らしめて蠶室を與ふといへる如く、各其好む處によつて其生を聊ぜしめ、其功勞を察して其俸祿を増し、妻を迎へ子を舉るに至らしむべし。海濱に在る者は遂に海軍の用に充つべく、桑田に在る者は陸軍農兵の用に備ふべし。其他刀匠、銃工を初、國用に充つべき事に力を竭んと願ふものは悉く請に任すべし。』

一處女の如きも亦同じ、専ら養蠶の道を教へ其他好む處に隨て紡績・織経皆其物品を與へて其力に食しむべし。一假令多眷ならず共、一藩の婦女をして養蠶の術をなさしめば各自の富足を得る而已ならず、遂に國用を裨益するの偉績をなすべし。』

とし、士も亦富ますことが急務なりとしてゐる。<sup>21)</sup>之はかの家中工業の獎勵若くは後の士族授産の思想と相類するものと見ることが出來やう。

20) 横井小楠、下巻、70—73頁

21) 同上、35頁。文久元年正月四日荻元田兩氏宛書狀には「舊冬は御家中御借米先一ヶ年の處御返しに相成る、此一事に因て家中案外の御仁恵と相成り上下一統誠に難有存候」(同上、348頁)とあつて借米の一部返済が行はれたといふ。

## 七 財用論及紙幣論

小楠曰く『國家事の急なるに臨んでは財用の有無を論ずるに遑あらず、只其贍らざるを恐る。國家を濟ふの誠意即財を生ずるの源なり』<sup>22)</sup>とし、海軍を起す必要を説ける條には『夫れ非常の海軍を起さんと欲せば先づ非常の費を辨せずんばある可らず。非常の費用を辨せんには非常の事業を起さずんば有べからず』としてゐるが、その方法としては『惣じて天下列藩の疲弊今日に極りたれば如何に無用を省かれたれ共、海軍の費用に供するに足る可らず。去らば又天下の農商に課せんとせば農商の疲弊更に甚しく忽に天下の人心を失ふ可し』とし、よつて『非常の事業を起すには幕府列藩均く課金を出されざることを得ず、試に高一萬石に年々百兩の金を課すれば總計大凡二十四五萬兩内外なり』とて幕府列藩均しく課金を出すべきことを説いてゐるが、この課金によつて『一、銅鑛を開く。一、鑛山を開く。一、船材を貯ふ』ことが必要であり、この銅鐵船材の經綸行はれば百害を去つて百利を來たす莫大の國益となるに非ずやと論じてゐる。<sup>23)</sup>

然し前述の農工商を富まし士を富ますためには、更に紙幣發行の方法によるべきことを論じてゐる。即ち曰く『先づ一萬金の銀鈔を製し、民に貸して養蠶の料に充て、其繭糸を官に收め、是を開港の地に輸し洋商に賣ならば大約壹萬千金の正金を得べし。如此なれば楮札數月を開せずして正金となつて、言ふべからざるの鴻益ある而已ならず、加ふるに千金の利有り。官府此利を私することなし、公に衆に示し悉く是を散して救恤し其他出て反らざるの所用に給す。仍之利を得る事多ければ所用益足るべし。膏繭糸而已ならず民間の所産、制するに此法を以てし、年々正金の入るを見て楮銀を出し、財用を通する事前の如くならば民間の生産も無數に増進し、官府も年を逐ふて正金に富むべし。正金の融通自在なれば物價の貴きは憂るに足らず、上下の便利是に過たるはなし。乍併もし楮銀増溢の恐れあらば、正金を以て銀局或は司農局に就て楮銀を買ふて其用に給せば官府諸局の殷富も足を翹て俟つべし。』

22) 同上、59—60頁

23) 同上、24、28頁

と論じ、今や日本と外國との銀幣の直段平均せざるを以て種々混雜を生じてゐるが、日本の物品を洋銀に易れば非常の下値となるから、今に於て日本の物價を騰貴せしむるも一策なりとし、轉じて『物貴して金銀不足なれば世上の融通逼迫する故、たとへば物品三倍の高價とならば、銀札も亦三倍に増益せざれば貨財流通し難し』と論じてゐるが、而も亦『官府の正金山の如くならんには通用の銀札水のごとくなる共故障も懸念もある事なくして士民共に大に便宜を得べし』と説いてゐる。<sup>24)</sup>然らば紙幣の流通はその背後に金幣があるからである。從て紙幣が元金に超過せば、民の信用を得ず、その害救ふ可らずとの間に對しては

『官の爲にして紙幣多きに過れば民其害を被りて信ぜず。國事民用の爲に其員を増す、民其澤を受て疑ず。昔年の貨幣は官の用に製して官の物なり。今の紙幣は民の爲めに増て民の用なり。民是を信ぜざるは、民の自ら疑ふにて自ら其害を受ける道理なれば、決して信ぜざるの理なし』

と答へ、更に官の爲にすると、民の爲にするととの差別其他を説いてゐるが、<sup>25)</sup>其論は必ずしも經濟學的の説明ではなく、政治論に終つてゐる點が少くないと思はれる。

## 八節 儉論

天保十四年に起草せる「時務策」の一節には節儉の政を行ふべきことを説いてゐる。<sup>26)</sup>先づ當時肥後藩の上下士民共に生活奢美に陥りし事實を衣・食・住各方面について詳細に説明し、今にして節儉の本に立返るに非れば大なる弊害を生ずるであらうと論じてゐるが、その節儉の本とは『聊も官府に利する心を捨て一國の奢美を抑へ士民共に立ち行く道を付くるを云事なり』とし、從來の節儉令は上の御難澁に因て諸事御取締に及ばれ、家中手取

24) 同上、36—37頁  
25) 同上、60—62頁  
26) 同上、65—70頁

米を減じ、町在より寸志銀を徴する方法にて、簡言すれば上の難澁を下より救ひ奉るのであるが、之は節儉ではなく聚斂の政に外ならぬ。『聖人の道の節儉は上下持ち合ひ、不便利に暮し立ち行き付ることにて、聊も上一人の便利を謀る筋合には非るなり』とし、治國の大本はこの眞の節儉に立ち返る外になしとしてゐる。然らばその節儉を行ふためには如何にすべきであるかといふに、家中衣服は上下貴賤を分たず、共に木綿地布に限り、飲食は珍客たりとも肴一種に極め、家居は當時の儘にて漏止め迄をなし一切作事を禁じ分外に奢美なるは破却せしめ、上下貴賤の別は染色か紋付無紋の類にて目印を立つべきである。かくの如く嚴重の節儉の政を行ふときは奢美無用の諸物を省き、僅に日用に用ゐる當然の物迄を買ひ求むることとなるべきを以て、衣食住の諸物、必ず下直とならざるを得ず、上下共に暮し能き世界に返る可きである。總じて政事は民の耳目の向ふ方に導くときは如何なる嚴敷法令にても悦び用ふるものであるが、人情に逆らひ耳目の向はぬ方に進むときは、差障りもなき些少の事も承引せざるものである。今日は土農共に奢美を厭ひ節儉に心付きたる時節であるから、非常の節儉令を出すに恰適の時節なりと斷じてゐる。要するに節儉は上のための節儉ではなく、民衆のための節儉であると論じてゐることは大に注意すべき點であらう。

## 九 庶政革新論

次に政治思想についてその一斑を見るに、小楠は先づ以て公武一和を理想としてゐた。これは文久二年の幕府への建白に『公武の御間柄御隔絶と相成候ては天下之人心更に一定仕様も無御座候へば、如何様之善謀良策も難

被行所以に御座候。方今之勢天命人心之新に御隨ひ君臣の大義を御立被遊、君令臣行之實事被行候へば 皇國人心自然に一致いたし候事は相違有御座間敷、是則 御國體之第一義と奉存候<sup>27)</sup>といへるによつても明かであらう。更に庶政の革新について之を見るに、慶應三年十一月の春嶽への建言中に

『一大變革の御時節なれば議事院被建候筋尤至當也。上院は公武御一席、下院は廣く天下の人才御擧用。四藩先執政職被仰付、其餘は諸侯賢名相聞へ候上追々御登用。

皇國政府相立候上は金穀の用度一日も無んば有る可らず。勘定局を被建<sup>此人選差しより五百萬兩位の紙幣出來</sup>皇國政府の官印を押し通用可相成事。

皇國中の知行に課し高壹萬石に百石と定め政府の貢米に可被仰付事。

但、幕府御辭職なれば莫大の用度を被省、諸侯室家歸國參勤相止江戸引拂にて是又莫大の省減なり。十分一の貢米は當然なり。紙幣は此貢米より漸々取り收之事。』

とあり、其他刑法局海軍局の建設、交易、學校等のことに論及してゐるが、<sup>28)</sup>「國是七條」中にも『大開言路、與天下爲公共之政』といひ、尙『止諸侯參勤爲述職』『歸諸侯室家』等の項目を掲げてをり、<sup>29)</sup>上下兩院の議會制度の採用、參觀交代制度の改革等の意見を持つてゐたことが明かである。

## 10 結 言

以上に於て小楠の經濟思想の主なるものを概説したが、その思想が頗る進歩的であつたことは既に明かであると思ふ。即ち夙に開國思想を懷き、出貿易の必要を説き、商社の設立、商權回收を論じ、士も亦富ますことの必要を述べ、幕府列藩への課金、紙幣の發行を説きたるが如きそれである。また參觀交代制度の改正、議院政治の

27) 同上、98頁

30) 拙著、幕末の新政策、165頁以下參照。

28) 同上、93—95頁

29) 同上、97—98頁

は參觀交代制改革の外、江戸における諸大名家屋の破却、大阪其他豪家よりの諸大名の借金を十ヶ年間据置にすることを説き（横井小楠、下巻、233頁）此等の政策によつて大貧國を大富國となし得る旨を説いてゐる。



採用を論じたる如きも注意すべきことであらう。

此等の思想は所謂幕末の經濟思想として當時の先覺者によつて唱へられた點もないではないが、小楠独自の見解によつて説かれてゐる所も少くない。例へば開國論について見るにそれは必ずしも西洋風をよしとするに非ず、交易も政事も皆民を養ふを本體とする。富國強兵、外國の侮を禦ぐためには開國交易の必要があるといふのであつた。また商權回收論や節儉論にしても庶民を富まし、上下共にその生を遂ぐるためであつて、獨り官府のみが利益を得るためではなく、寧ろ民の爲めにするものである。この基礎的觀念から資金融通論も産業獎勵論も解されなければならぬものであり、紙幣論の如きも、この考を以てして始めてその所論を理會することが出来る。

小楠の所論は單なる思想たるに止まらず、それが實現に移されたものも少くない。例へば參觀交代制度の改正の如きそれである。<sup>31)</sup> また萬延元年の「富國論」に述べられた大問屋を設けて國內諸産物を官に買上げることについては文久元年正月四日の荻角兵衛・元田傳之丞へ宛てた書翰にも<sup>32)</sup>

『大問屋と云役所を建、何品によらず民間職業之物をかひ上る。其役人は官府にては町奉行・勘定奉行・郡奉行・製産方當時專三岡主として取斗ふ。其下役を本しめ役と云ふ。是は國中町・在家家の者に申附<sup>當時給人追々増員之等</sup>此本しめ役之下に町・在にて可然人物を撰びて五十人斗を付て領内を打廻り、職業の品を買ひ、或は其本入等を世話致さしむ。尤買入候品は諸方にてさばき候ことと大切に是又右の役人より國々にも出して取斗ふ事也。(中略)此問屋出來に因て市・在一統甚敷はげみ立、年の明暮杯は莫大にもち懸候て勢甚よろしく御座候』

とあつて、事實と密接な關係を持つてゐるわけであるが、「福井縣史」によれば福井藩に於ては安政五年十二月物産惣會所が設立せられ、各地の豪商を元締とし、藩廳より吟味役を出し會計を監督せしめたが、各地の製造品雲集し、之を北海道其他に賣つて正貨の輸入増加し、倉庫の不足を見るに至つたといふことであるから、<sup>33)</sup>「富國論」

31) 拙著、幕末の新政、166—171頁

32) 横井小楠、下卷、348—349頁

33) 福井縣史、第二冊第二編、724頁

以前に類似の事實があつたことかとも考へられるが、思想と事實との相關々係はこの場合にも見られる。尙福井藩に於て小楠の門人であつた三岡八郎後の由利公正が紙幣を發行したこと、後明治政府に於て三岡等の建議に基き太政官札が發行されたことも、思想的に聯關を求め得べき事柄であらう。

小楠が開國論者であり、進歩せる思想を持つてゐたことは前述の如くである。従て小楠を以て佐久間象山と共に開國論者の兩横綱とし、或は『安政乙卯の年に在りて天下誰か此見を具したるや』とし、或は小楠の思想は當時の思想界とは一世紀だけ進んでゐたとも説かれてゐるが、それが果して妥當であるかは大なる疑問であらう。<sup>34)</sup>いふ迄もなく本多利明は寛政年間に既に開國發展の大理想を説いてゐる。降つてペリー來航當時について見るも、嘉永六年に於て向山源太夫・勝麟太郎・古賀謹一郎・江川太郎左衛門・高島喜平等が何れも開國貿易の説を述べてをり、殊に高島喜平の六年十月の上書は戰術的見地からも經濟的見地からも開國貿易の必要を力説したものであり、佐久間象山は當時尙攘夷思想を抱き、その開國論は文久二年の上書に於て之を見るに至つたのである。安政以後、學者・政治家・諸藩・有司其他に於て開國論が次第に多く唱へられ、彦根藩の如きは嘉永六年八月二十九日の上書に於て有無相通するは天地の道なりと喝破してゐる。<sup>35)</sup>小楠も安政以後の開國論者として最も傑出せる一人であつたことはいふ迄もないが、過褒は必ずしも信ずるを得ない。

(附言) 本稿は昔て「日本經濟史辭典」の一項目として「横井小楠」を執筆せる際「小楠遺稿」によつてその大綱を記しておいたものであつたが、其後山崎正董氏の「横井小楠」上下二卷の刊行を聞き、その再版發行の後漸く之を見ることを得、多大の増補改稿をなすを得たのであるが、原稿締切期日と紙數との關係から、割愛した點も少くないのみならず、書簡・詩文等の資料も十分に検討する餘裕がなかつたことを遺憾に思ふ。他日更に稿を補ふの機會を得たいものである。

34) 横井小楠、上卷、334—341頁

35) 拙著、近世の經濟思想續篇、41—48、151—153頁